

## 地震、雷、火事、親爺

遠藤 周作

むかしの若い者にとってコワイものが幾つかあった。地震や雷や火事はとも角として親爺さまというのは大変、コワイ存在であった。

コワイものはいたるところにあった。むかしの若い者はこうしたコワイものを持つことによって何よりも屈辱感に耐えるということを学んだ。

むかしは男が「大人になる」条件として、この屈辱感に耐えることを一つの条件とした。仕事を憶える時に先輩や兄弟子の拳固げんこも我慢しなければならなかったし、走り使いもやらされた。入営をすれば古参兵の身のまわりの世話もさせられた。そういうコワイ存在が大人になる階段の前にあって、そのコワイ存在から屈辱を味わわされ、それを我慢して、やっと一人前の大人とみとめられたのである。

こういう大人になるためのやり方については今の若い人は色々、批判もあるだろうし、反論もあるだろう。

だが今の若い世代にもっとも欠けているものは「屈辱感に耐える」訓練である。この訓練が行われないで、そのまま社会から大人あつかいにされると、おのれのすること、なすことはす

べて正しいと思うようになる。

先日、タクシーで代々木近くを走っていたら、オートバイに友人をのせた若者が車と車との間をアクロバットのようにぬいながら走っていった。

交差点で私のタクシーを運転していた中年の運転手さんが、

「危ないじゃないか」

と注意すると、

「こっちが楽しんでいることに口を出すな」

とその学生風の二人の青年が怒った。その態度にはおのれのすること、なすこと、すべて正しいという気持があらわれていて、「ああ、こいつらまだ大人でないな」と私は思ったのである。

本当の大人というのは、自分のすること、なすこと、必ずしも正しくないということを身にしみて知っている存在である。そして大人でない者はその反対なのである。大人と大人でない者との違いにこれほど明瞭な定義はない。赤ん坊をみたまえ。赤ん坊ほど自己主張をして聞きわけのないものはないからだ。

今の若い世代には「地震 雷」ではなく反対に「自信か、身なりか」が多い。たしかにそれはそれで悪くない部分もある。しかし彼等とつきあっていると何よりも感じるのは何かに耐える力が少ないことだ。とりわけ屈辱感に耐える力がない。コワイものが彼等にはなかったからだ。だから、畏れるということをや彼等は知らない。

注意してほしい。私は畏れると書いて恐れるとは書かなかった。畏れると恐れるとのちがいを若い人は知っていない。

〈編集部注〉恐れるとは権力などにビクビクすること、畏れるとは人間をこえた天とか神とか道とかに畏敬の念を持つことです。

遠藤周作『勇気ある言葉』（集英社）より



遠藤周作文学館

遠藤周作文学館が立地する長崎市外海地区は、かくれキリシタンの里としても知られており、遠藤文学の原点と目される小説『沈黙』の舞台となった場所でもあります。

この縁により、遠藤周作の没後、手元に残された約三万点にも及ぶ遺品・生原稿・蔵書等がご遺族から寄贈・寄託され、平成十二年五月に開館されました。

日本を代表する文学者遠藤周作とその文学の世界を堪能し、理解・研究する場として、また、角力灘（すもうなだ）を見下ろす絶好のロケーションを楽しむことのできる施設です。